

献呈の辞

奥隅栄喜教授は1946年に明治大学商学部に入學されて以降、半世紀に近い歳月にわたって一貫してこの学部に着を置き、研究・教育の両面にわたって尽力されてきた。この第二次大戦後の半世紀は、日本の社会にとっても明治大学にとっても、新しい経験とそれに基づく自己転換の歳月であり、とりわけ社会科学をその領域とする本学部のような場所に属する研究者にとっては、日々の経験がそのまま新しい課題を生み出すという、目まぐるしい時間の連続であった。その中であって奥隅教授は、「企業金融論」という、まさしくこの目まぐるしさの中心をなしていた企業活動の、しかもその主要な蓄積手段となっていた資金調達の問題領域を研究・教育活動の主たる対象とするという、商学部にとっては要というべき役割を担って来られたのである。創立後90年の歴史の間、日本の大学教育の中で揺るがない地位を占め続けてきたわが商学部が、戦後経過してきた時代への対応の積み重ねは、ほとんどそのまま奥隅教授の足跡である。

奥隅教授は、戦後の商学部の元老として活躍された故春日井薫教授の指導のもとで旧制大学院の課程を終了されるとともに、1949年に商学部助手となられ、1954年に専任講師として教壇にのぼられ、助教授を経て1962年に教授に就任されて今日に至っている。その間1962年から1年間のアメリカ・スタンフォード大学における在外研究を経験され、1970年には明治大学から学位請求論文『資金の本質と建築金融論』に対して商学博士の学位を授与されている。これらの研究の成果は、本巻の巻末に掲げられている業績目録に示されているような形で発表されている。門外漢である私にはこれらの研究業績の意義を推し量ることはできないが、教授が所属された金融学会をはじめとする数多くの学会の会員の知るところである。

教授の足跡は大学の内外におけるさまざまな役職を通じて、専門を異にする人々にも広く認識されている。学部の中では1966年に産業経営学科長を勤められたのをはじめに、1978年には商学科長と商学部教務主任を兼務され、そして1980年に商学部長に就任された。二期目の学部長職の途中で、1984年4月から学校法人明治大学の教務担当常勤理事に選任され、全学の教育・研究体制を整備する学校法人明治大学の責任者として、その後2年間にわたってその重責を担われ、現在の本学の施設・設備や教育体制、研究組織の状況に大きな影響を残された。

このような公的な役職と並んで、体育会競走部、硬式野球部およびマンドリン倶楽部の部長などを歴任され、全国的な注目を浴びている本学学生の課外活動にも目を配られ、これらの学生団体の活動には、時には他大学の学生をも含めた親善団体の団長として諸外国に同行されなど、国の内外に及ぶその活動を見守ってこられた。現在財団法人全日本大学野球連盟の常任理事という職に就任しておられることも、こうした学生の課外活動に対する奥隅教授の暖かい心配りを多くの人々が知っているためであろう。公私にわたってこのように多数の大学内の役職を歴任するこ

とを厭われなかったことは、奥隅教授の大学と学生に対する深い愛情の現れとして、その50年に及ぶ経歴の意義を一層明らかにするものであろう。

奥隅教授は本年2月に古稀を迎えられ、本学の規定にしたがって3月をもって定年退職されることになった。大学に対するその長い功績を記念する本号は、商学部関係者の教授に対する深甚な感謝の念を、ささやかな形ではあれ表明するものである。教授が今後益々ご健康に留意され、その半生を注ぎ込まれた本学が、新しい時代に向かって前進していく姿を末永く見守って下さることを心から願うものである。

1995年1月吉日

商学部長 栗田 健